

うめきの中からの希望ローマ 8:18-25

2026. 10. 11、丘の上、NO. 783
春日部福音自由教会 山田豊

今年も8月の中央会堂の前面に「アッシジのフランシスコの平和の祈り」が掛けられていました。10月3日は、フランシスコが召天してから800年の記念日でした。世界のカトリック教会と連帯し、日本でも、9月1日から10月4日までの期間を「すべてのいのちを守るための月間」と定め、被造物と命を大切にする特別な時を過ごしておられました。

今夏の大雨による洪水の被害、ネパールと中国国境付近の氷河崩壊による大規模な土石流と大洪水は、多くの人たちに衝撃と不安を与えるものでした。自然災害だけでなく、いまだ終わることのない戦争や武力をちらつかせる行動、経済的に圧力を加える大国の存在、加えて、AIが人類に壊滅的な被害や存亡にかかわるリスクがあるという発言は、ますます私たちを不安に落とし込むようなものです。

本日の個所でパウロは、被造物が虚無に服したこと(20節)、被造物は滅びの束縛の中にあること(21節)、呻き苦しんでいること(22節)を語っています。黙示録8章には、7つのラッパが吹き鳴らされる時のわざわいが描かれていますが、今の時代ほどこれらの描写をリアルに感じることはなかったのではないのでしょうか。

そして被造物である人間もまた、今までになかったほどに呻き苦しんでいるのではないのでしょうか。老病死は、すべての人が経験しなくてはならない、人としての苦しみなのです。この原因は、造り主である神の御命令に背き、神との交わりが断ち切られたことにあります。このことの故に地は呪われ(創世記3:17)、被造物は苦しみの中にあるのです。

そのような中で、人はからだの贖いを求めています。救われ、新しくされることです。ここでは、被造物もまた新しくされることを願っていると、書かれています。これは面白いポイントです。

自然災害を防ぎ、そこからの復旧復興のために、いろいろな試みがなされています。地球以外の星に移住しようというミッションがあります。人は、この世界はいつか滅びるがその前に救われたい、と心の奥底では願っているのです。

新潟県の板倉地区は、昔から地滑りで苦しんできた地域で、旅のお坊さんが人身御供となってこれを鎮めた、という伝説があります。どうやら史実らしいのですが、そこに人の情けを感じます。聖霊は、人のうめきをご自分のこととして苦しみ、ご自身がうめきながら父なる神に私たちをとりなしてくださっているのです。

引用聖句

イザヤ 2:4 主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。

黙示 8:6-12 また、七つのラッパを持った七人の御使いたちは、ラッパを吹く用意をした。7 第一の御使いがラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。8 第二の御使いがラッパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。9 また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。10 第三の御使いがラッパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の上に落ちた。11 この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人々が死んだ。12 第四の御使いがラッパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。

創世記 3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

ローマ 7:17 ですから、今それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪なのです。

ラウダート・シ部門のメッセージ

2026 年すべてのいのちを守るための月間 「いのちの水」

毎年 9 月 1 日の「被造物を大切に作る世界祈願日」1 から、アッシジの聖フランシスコの記念日である 10 月 4 日までの期間、世界のキリスト者は「被造物の季節(Season of Creation)」を祝っています。日本の教会も、2019 年の教皇フランシスコ来日時呼びかけにこたえ、2020 年よりこの期間を「すべてのいのちを守るための月間」と定め、意識と自覚を深めながら、具体的な行動へと踏み出すよう歩みを重ねてまいりました。2026 年の「被造物の季節」のテーマは、「いのちの水(Living Water)」です。このテーマは、預言者エゼキエルの幻ヴィジョンに由来します。(以下略、カトリック中央協議会 HP より)

新潟県板倉地区の人身御供伝説と地すべり資料館

新潟県上越市板倉区(旧・板倉町)に伝わる「人柱伝説(人身御供伝説)」は、度重なる地すべりに苦しむ村を救うため、旅の僧が自ら人柱となった悲話です。

物語の内容

1. 大蛇の企みを聞く

鎌倉時代、信州から黒倉峠を越えて板倉の地(猿供養寺村など)へ向かって一人の旅の僧が、道中で何匹もの大蛇が集まって相談している声を耳にします。大蛇たちは「地すべりを起こして川をせき止め、自分たちの大きな住み処(池)にしよう」と企んでいました。さらに、「もし人間に気付かれて、栗の木の杭を 48 回叩いて深く打ち込まれ、人柱を立てられたら地すべりが止まってしまうから、知られないうちにやろう」と話していました。

2. 見つかった僧と村の苦難

隠れて聞いていた僧は大蛇に見つかってしまいますが、「聞いたからには生かして帰せない」と言われたところを、どうにか逃れ(あるいは口外しない約束などで)村へたどり着きます。当時の村は、度重なる地すべりによって田畑や家屋が破壊され、村人たちは離散寸前の極限状態にありました。

3. 自ら人柱に

村の惨状と大蛇の企みを知った僧は、「どうせ自分の命は長くはない」と考えます。そして、村を救うために自ら進んで人柱になることを決意しました。言い伝え通りに栗の木の杭を打ち、大甕(おおがめ)の中で座禅を組んだまま埋められ、人柱となったことで大蛇の企みは阻止され、村の地すべりもピタリと収まりました。

伝説が実話に変わった瞬間

長年ただの言い伝え(伝説)だと思われていましたが、昭和 12 年(1937 年)に地元の寺野地区(正浄寺跡)で田の工事(客土の採掘)中、大きな素焼きの大甕(高さ約 90cm、直径約 69cm)が発見されました。中を調べたところ、**言い伝え通りに座禅を組んだ状態の人骨**が見つかり、昭和 36 年(1961 年)の新潟大学医学部の調査で鎌倉時代末期～室町初期頃の 40～50 代の男性のものであると判明しました。

現在、現地には発見された人骨を祀る**人柱供養堂**が建てられており、隣接する地すべり資料館とともにその歴史を伝えています。

[地すべり資料館のご案内 - 新潟県ホームページ](#)